

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

—— 和歌を主題とする組香(十) ——

本稿は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介—和歌を主題とする組香(一)—(『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月)、『同一同(二)—(『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月)、『同一同(三)—(『社会科学』第47巻第1号、二〇一七年五月)、『同一同(四)—(『社会科学』第47巻第2号、二〇一七年八月)、『同一同(五)—(『社会科学』第47巻第3号、二〇一七年十一月)、『同一同(六)—(『社会科学』第47巻第4号、二〇一八年二月)、『同一同(七)—(『社会科学』第48巻第1号、二〇一八年五月)、『同一同(八)—(『社会科学』第48巻第2号、二〇一八年八月)、『同一同(九)—(『社会科学』第48巻第3号、二〇一八年十一月)に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、御の巻から、鸚鵡返香、雁金香、和哥始香、また、書の巻から、三千年香、梅香の、計五つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介(『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月)を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

- 一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには、〃〃〃〃を付して丁数を記す。
- 一、考察には、(1) 竹幽本組香の方法、(2) 和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。
- 一、(1) の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」(『社会科学』第46巻第3号)を参照されたい。
- 一、(2) で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2(角川書店、二〇〇三年)に拠る。
- 一、巻末には影印を付す。

矢野 環
福田 智子

《御卷一三七》鸚鵡返香

【翻刻】

△(朱) 鸚鵡返香

宮女

桜町中納言

十訓抄

雲の上は有し昔にかわらねと見し玉たれの内やゆかしき

鸚鵡返の哥は、小町のよみ哥と世にいへと非なり。桜町中納言成範卿、事ありて免し帰されて内裡に参れたりけるに、女房達の中より昔を」御六二オ思ひ出て、此哥よみ出したるけるを、返事せんとて、や文字をぞの字に直して、みすの内へ入て出られしと十訓抄に見たり。

一 試なし。

一 十炷香の札を用。

一 一二三の香、各二包充、ウ香一包、客香一包、以上八包出香とす。」御六一ウ

一 青包紙七包ウ二三各二包充、ウ二包充、ウ客一包充、ウ客一包充、ウ客一包充、ウ客一包充、ウ客一包充、赤包紙八包ウ二三各二包充、ウ二包充、ウ客一包充、ウ客一包充、ウ客一包充、ウ客一包充、ウ客一包充、客香を赤包紙に

包除置、残七炷の香、青包紙に包む。赤包紙には香入らずして、青の一と赤の一と壹結となし、二三ウも青赤一包充、同名を一結となし、都合七結打交、いづれより成とも一炷充焚出す。青包紙は鶯へさし、組合たる赤包紙は除置く也。出香一順廻りて香元へ戻ると其焚殻を除たる赤包紙」御六二オ

に包て銀盤の向に並べ、又次の一包を焚出す。七包ともに

其式等し。焚殻皆包終りて七包よく打交、其内一包除け

不此二包は、用、初に除置たる赤包紙の客香を加へ、都合七包又交て、

一 炷充焚出すべし。十四炷皆焚終りて一同に包紙を開く也。

一 開様は十四炷ともに無試十炷香の通りに札打也。初の七炷

に札打と写留て、其札不残連中銘々へ返し、後の」御六二ウ

七炷に又打するべし。後の客香には餘札二枚一同に打てよし。

一 記録点は客香三点、ウ香二点、地香一点充也。各独間の差

別なし。初七炷は無試十炷香の通りに点を掛る。後七炷の

点掛様左のごとし。

初二炷結中

各一点充 合四点也 (朱)

後二炷結中

各一点充 合三点也 (朱)

初二炷結中

各一点充 合三点也 (朱)

後二炷結中

各一点充

初二炷不結

各一点充

後二炷結中

各一点充

初二炷と後一炷と結たるは点なし。

」御六三オ

初ウ中 二点
 後ウ中 二点
 合四点也(朱)

初ウ中 二点
 後ウ外 点なし
 初ウ外 点なし
 後ウ中 中たれども点なし
 客香は客札を中とす。三点充也。

出香と打札と同名異名に拘はらず無試十炷香の通と心得べし。客香には客の札斗りを中とす。今茲に安見ため香と札と同銘を認て出せり。」御六四オ

香と札中りても点なきは朱圈にて知るべし(朱)

〔表〕
 地香にウの札打て、上下結て中たるは、直に香銘とす。假令「御六四ウ二の香二炷にウ札二枚打たらは、二の札に用ゆ心也。皆同し。

一 香の名目を左のごとく記録に認置く。

一(朱)ウ
 二(朱)ウ
 三(朱)ウ
 四(朱)ウ
 五(朱)ウ
 六(朱)ウ
 七(朱)ウ
 八(朱)ウ
 九(朱)ウ
 十(朱)ウ
 客(朱)

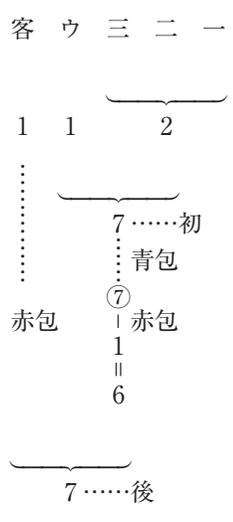
まづ艸稿を認め、札名を写し、点を定て後に、夫に見合て清書に認有る文字に点を掛る。たとへば本香三と結び中りた

るは、聞の方に付て、しきの文字に点を掛る。或は二をウに用ひ(ウ三と結び中りたる)御六五オは、ゆかの文字へ点を掛る。一三ともに同然也。始二炷結びて中りたるは、上の字二点焼返しと三炷聞たるは、下の字へ一点、四炷とも聞たるは、二字共二点つ、始一炷聞返しして二炷聞たるは、上の字一点、下の字二点、返し斗結中りたるは、下の字斗二点、やの香は二点返しと結聞たるは四点、その香聞たるは三点也。記録認様左に顕す。」御六五ウ

〔艸稿〕 一除(朱) 御六六オ
 鸚鵡返香記 一除(朱)

〔表〕 御六六ウ

【考察】
 (1) 竹幽本組香の方法



〔客〕香を各一包の計八包を用意する。試香はない。包紙は、青

を七包、赤を八包用意し、まず、「客」香一包を赤包紙に包む。そして、残りの香、七包を青包紙に一包ずつ包み、空の赤包紙七包と青・赤の対にする。このとき、包紙の角には、あらかじめ「一」「二」「三」「ウ」の香名を記しておき、同じ香名で青・赤の包紙の対になるようにしておく。

初段では、この七対の包を交ぜ、一炷^{*}ずつ焚く。青包紙は、開いて香を出したら鷲に刺す。組み合わせていた赤包紙は、香元^{*}の手元に置いておく。香炉が一巡して香元に戻ってきたら、その焚殻を空の赤包紙に包み、銀盤の向こう側に並べてから、次の一炷を焚く。この要領で、七包すべてを焚き出す。

後段は、赤包紙に包み替えた焚殻七包を交ぜ、一包を除いてから、初めに除いておいた赤包紙の「客」香一包を加え、計七包を焚く。十四炷すべてを焚き終えたら、包紙を開いて答えを披露する。

答えには十炷香札を用い、無試十炷香の要領で札を打つ^{*}。初段の七炷に打った札は、香之記^{*}に書き留め、すべての札をいったん連中に返し、後段の七炷の答えに用いる。後段にしか出ない「客」香には、どれでも余った札二枚を打つ。

記録点は、聞き当てた人数に関わらず、「客」香は三点、「ウ」香は二点、その他の地香は一点ずつである。「ウ」香と地香は、初段の七炷では無試十炷香のとおり、また、後段では、前段

と合わせて以下のように点を付ける。まず、地香の場合、初段の二炷を聞き当て、それと同じ後段二炷を聞き当てれば各一点で計四点、後段一炷では計三点である。また、初段の一炷と同じ、後段の二炷を聞き当てても、計三点となる。後段のみで二炷^{*}同香を聞き当てると計二点を得るが、初段一炷と後段一炷を聞き当てても点にならない。次に「ウ」香の場合、初段と後段をともに聞き当てれば各二点で計四点、初段のみでは二点であるが、初段を聞き違えると、後段で聞き当てても点は得られない。

この点の付け方については、第一の表にまとめられている。表の上段から順に、初段と後段で、地香同香二炷を聞き当てた場合四点、初段二炷に後段一炷では三点、初段一炷に後段二炷では三点、後段二炷のみでは二点、初段と後段一炷ずつでは点なし、「ウ」香同香を前段と後段で聞き当てると四点、前段のみでは二点、後段のみでは点なし、ということである。

なお、無試十炷香の要領で札を打つため、香名と札名とが一致するとは限らない。また、本組香の香之記を書くためには、複雑な手順が必要である。そこで、まず草稿を作るように指示されている。すなわち、香名を、上から、前段の「一」の香二炷、後段の「一」の香二炷、前段の「二」の香二炷、後段の「二」の香二炷、前段の「三」の香二炷、後段の「三」の香二炷、「ウ」

の香前段・後段各一炷、「客」の香一炷の順に記し、その左側に、札名を書く欄を設ける。そして、香の出に合わせて、連中の打った札名をそのまま記す。たとえば、初段一炷目が「二」の香であったとすると、通常、無試十炷香では、みな「一」の札を打つが、そのとき草稿では、初段の最初に出た「二」の香名の横に、札名「二」と記す。なお、初段は墨で、後段は朱で、香名と札名を記しておく。これをもとに、前述の規則に従って点を付ける。

この草稿をもとに、香之記を書く。草稿に記された香名は、上から順に、前段の「一」の香二炷、後段の「一」の香二炷、というふうに、八つに区分することができる。これに、本組香の主題である『十訓抄』の和歌の結句「うちや（そ）ゆかしき」の八文字に、一文字ずつ当てはめる。すなわち、「う」「ち」「一」の香、「や」「う」の香、「そ」に「客」の香、「ゆ」「か」に「二」の香、「し」「き」に「三」の香である。そして、先に草稿で付けた点をもとに、これら一文字一文字に合点を付す。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『十訓抄』一ノ二十六に載る。

成範卿、ことありて、召し返されて、内裏に参ぜられたり

けるに、昔は女房の入立なりし人の、今はさもあらざりければ、女房の中より、昔を思ひ出でて、

雲の上はありし昔にかはらねど

見し玉垂れのうちや恋しき

とよみ出したりけるを、返事せむとて、灯籠のきはに寄りけるほどに、小松大臣の参り給ひければ、急ぎ立ちのくとて、灯籠の火の、かき上げの木の端にて、「や」文字を消ちて、そばに「ぞ」文字を書きて、御簾の内へさし入れて、出でられにけり。

女房、取りて見るに、「ぞ」文字一つにて返しをせられたりける、ありがたかりけり。
(新編日本古典文学全集)

藤原成範(一一三五―一一八七)は、平安末期に活躍した歌人で、風雅を好み、桜を愛したことから「桜町中納言」と呼ばれた人物である。もとは宮中の「入立」(女房の詰所への立ち入り)が許された者。簾中入立)であったが、平治の乱で流罪となり、許されて都に戻ってきた時には、それもかなわぬ身となっていた。そこで女房が成範に詠みかけたのが、右の歌である。「見し玉垂れのうちや恋しき」(昔見た御簾の中が恋しくありませんか)という歌に対し、成範は、「ぞ」一文字を返した。時の権力者、小松大臣(平重盛 一一三八―一一七九)がやって来たの

をはばかり、急いでその場を立ち去らなければならなかったからである。

もちろん、成範の返しは、女房の歌の係助詞「や」を「ぞ」に換えて返歌としたもので、「見し玉垂れのうちぞ恋しき」（昔見た御簾の中こそが恋しいことです）の意となる。わずか一文字を言い換えただけの「鸚鵡返し」である。

本組香では、初段七包の香を聞き、その焚殻七包に新たな一包を交ぜた上で一包を除き、七包にして焚く後段から成る。これは、和歌の結句の仮名七文字を一文字入れ換えて七文字にして返すという行為に依拠している。また、香之記では、助詞「や」「そ」に、それぞれ「ウ」「客」の香を当てはめるが、これも、助詞一文字を入れ換えるという、この和歌説話の要点を踏まえた趣向である。

なお、この「鸚鵡返し」の歌は、謡曲『鸚鵡小町』でも知られるところである。年老いて零落した小野小町が、帝から下賜された和歌に対し、一文字を言い換えるだけの「鸚鵡返し」で返歌をし、かつての歌才を見せたという。だが、本伝書では、老残の小町の歌という説を否定し、成範の風雅を述べた説話を支持している点に注意しておきたい。

《御卷―三二》雁金香

【翻刻】

△（朱）雁金香

一 十炷香の札を用ゆ。

一 初雁方四人、帰雁方四人、冬の雁一人と分つ（註中九人に。冬は雁の人は一座の貴人、或は巧者の人に極る也。又は、時宜によつて、鬪を以て定むる事もあるべし。）

一 春の香三包、秋の香三包、雁金（朱）二包（朱）都合（朱）御七五オ八包、

二 炷間に焚出し、二炷充にて包紙を開て点を定むべし。

一 春秋の香、外に拵へ試に出す。雁金の香、試なし。

香組名目、左のことし。

春く（朱）霞かくれ 秋く（朱）霧の海

春雁（朱）帰る雁 秋雁（朱）はつ雁

雁春（朱）花を見捨る 雁秋（朱）たか玉章

御七五ウ

春秋（朱）年も越路 秋春（朱）春の古声

雁く（朱）二季鳥

一 二季の札、聞中たる人あらば、初雁帰雁の勝負はなし。二

季鳥の札中たる人、一座の内、勝たるべし。

一 本香四包（註中二柱間四度也）内に、二季出たらば是迄にて、残四包は不聞、

香は終る也。

- 一 記録点は、客の独聞三点、二人聞二点、三人よりは一点御七六オ充也。地香独聞二点、二人よりは一点充也。
- 一 初雁方秋の香、問違、帰雁方春の香、問違、冬の雁客香、問違は、各星一つ充附るべし。
- 一 最始記録板には二炷充認て、点星添て後に、清書すべし。

記録板認様、左のごとし。 御七六ウ

〔表〕

如此記て後に、二炷組合て札銘を記録すべし。

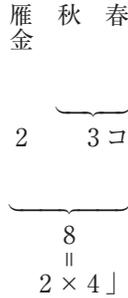
認様、左に記す。 御七七オ

雁金香之記

〔表〕 御七七ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、地香「春」「秋」の香、各三包と、客香「雁金」の香二包の計八包を用意する。地香のみ試香試香を行う。二炷聞き二炷聞きに焚き出し、その度に包紙を開く二炷開きとする。

連中は九人に限り、初雁方と帰雁方、各四人と、「冬の雁」一人に分ける。「冬の雁」には、連中の中でも身分の高い人、ある

いは香を聞くのが巧みな者とする。場合によっては鬮で決定することもあるようである。

答えには、十炷香札を用いる。「春」の香には「一」の札、「秋」の香には「二」の札、「雁金」の香には「ウ」の札を打つ。本香四包、すなわち、二炷聞き二度のうちに、客香二炷の組（香組の名目は「二季鳥」）が出香された場合は、残りの四包は聞かず、香席を終了する。最初の二炷聞きが「二季鳥」のときは、次の三・四炷目までを焚く。

* 香之記を書く前に、下書きとして、連中が打った札名を香名に換えて、「春」「秋」「雁」と記しておく。

記録点は、客香の独り聞き三点、二人は二点、三人以上は一点ずつである。地香は、独り聞き二点、二人以上は一点ずつを得る。また、初雁方が「秋」の香を、帰雁方が「春」の香を、「冬の雁」が客香を聞き違えた場合は、星をひとつずつ付す。「二季鳥」を聞き当てた人がいれば、初雁方と帰雁方の勝負ではなく、「二季鳥」を聞き当てた人の勝となる。こうして点を付け終わったら、香之記には、香名を二炷ずつの香組の名目に書き換え、合点と星を付ける。

なお、本組香は『蘭之園』とほぼ同じである。ただし、『蘭之園』では、連中の人数が、九人、七人、五人といった奇数のときに、初雁方と帰雁方の他に、一人だけの「冬の雁」を設ける

とする。

(2) 和歌作品との関わり

本組香には、和歌一首がそのまま掲出されているわけではなく、組香の題となっている「雁金」は、和歌に詠まれる重要な素材である。連中を分ける名称にも、「初雁」(秋に北方から渡って来る雁)、「帰雁」(春に北方へ渡って行く雁)、「冬の雁」(冬の間、沼沢などの湿地に棲みついた雁) というように、雁のもつ季節感が生きている。香名を「春」「秋」とするのも、「初雁」「帰雁」にちなんだものである。また、「香組の名目」中の「二季鳥」(後述)も、春に渡って行き、秋に渡って来る雁の異名である。

「香組の名目」には、九つの名目が列挙されている。歌題や和歌の表現の中にそれぞれ用例が見出される。

① 「霞がくれ」(春/春)

二百十四番 左

公継卿

めづらしくつばめのきばにきなるればかすみかくれにかりかへるなり
『千五百番歌合』春三、四二七番

② 「霧の海」(秋/秋)

(霧)

雁の舟わたる比とや朝なぎに霧しも空の海とみゆらん

『漫吟集』(契沖) 一二三九番

③ 「帰る雁」(春/雁)、「花を見捨る」(雁/春)

百首歌たてまつりし時、帰雁 前関白左大臣近衛

何にかは心もとめん花をだにみすてかへる春のかりかね
『新拾遺集』巻第一春歌上、八〇番

④ 「はつかり」(秋/雁)、「たが玉章」(雁/秋)

これさだのみこの家の歌合のうた ともりの

秋風にはつかりがねぞきこゆなるたかたまづさをかけてきつらむ
『古今集』秋上、二〇七番

⑤ 「年も越路」(春/秋)

(春廿首)

花園左大臣家小大進

みやこにて年もこしぢのかりがねはかへるとこよやたくひなるらん
『久安百首』一三二三番

⑥「春の古声」(秋／春)

(十題百首)
(鳥部十首)

秋のよの月にまちつるはつかりのかすみてすぐる春のふる
こゑ
『秋篠月清集』(藤原良経) 二五三番

⑦「二季鳥」(雁／雁)

雁

二季鳥忠峰詠出異名、春秋帰来物也

何方を古郷とて二季鳥年に二たび往きかへるらん

『蔵玉集』二三番

①③④の名目は、右に掲出した和歌以外にも用例は見出されるが、②⑤⑥⑦については、『新編国歌大観』に拠る限り、唯一例である。②は、契沖の歌の表現をそのまま用いているわけではないが、雁が編隊を組んで渡って来る時節、朝風の時間帯には、空一面に秋霧がかかり、さながら海に見えるという情景は、「霧の海」という表現にふさわしかろう。⑤の「年も越路」と「雁」との組み合わせも、今のところ他例を見ない。⑥の「春の古声」が「秋／春」の香の組み合わせに充てられているのは、良経の歌の初句にある「秋(のよの)」と結句「春(のふるこゑ)」に

対応させたものだろう。⑦の『蔵玉集』は、延宝九年(一六八一)、元禄一四年(一七〇一)に刊行され、「当時の本草書にも大きな影響を与えている」(『新編国歌大観』解題・赤瀬信吾氏)といわれる歌集である。「二季鳥」を「雁／雁」の組み合わせの名目に充てることについては、多言を要すまい。

以上のように、本組香は、和歌の伝統的な表現を踏まえつつ、特定の和歌に依拠した歌ことばを交えながら構成されている。

《御卷一三三》和哥始香

【翻刻】

△(朱)和哥始香

神代哥の始

下照媛

阿妹奈屢夜。乙登多奈波多迺汗奈餓勢屢。

多磨迺彌素磨屢迺。阿奈陀磨波夜弥。

多爾輔桝和桝邏須。阿泥素企多伽避顧祢。

(朱)味 粗 高 彦 根

人代哥の始

素盞鳴尊

夜句茂多菟。伊都毛夜霸餓岐。菟磨語味爾。

夜霸餓枳菟俱盧。贈迺夜霸餓岐廻。

哥の父母

百濟學士王仁

難波津に咲やこの花冬こもり今は春邊と咲や此花

陸奥安積米女

〔表〕 御八〇オ

安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかわ

一 素盞鳴方五人、下照姫方五人と分つ也。

一 十炷香の札を用。」御七八ウ

一 難波津の香三包、安積山の香三包、あもなるやの香一包客香、
二(朱)

一 八雲立の香一包ウ香、
ウ(朱)、都合八包聞香とし、皆焚終て後に香包

紙を開く也。

一 地香外に試に出す。客ウ香試なし。

一 一三五七番に焚出す香を上句と號く。二四六八番に焚出

す香を下句と唱也。

一 始に出る無試香に、あもなるやの札をうつ。後に出」御七九

オたる無試香に八雲立の札を打べし。

一 記録点は、相手向の上下句の聞によつて点星あり。左のご

とし各點聞の
香別なし。

○ (朱) 上の句聞 二点 下の句聞 一点づ、上の句も聞たる
時は二点也

○ (朱) 上下の句聞違は星二つ充也。

○ (朱) 一方上の句聞違は星二つ、双方聞違は星一つ充

也。

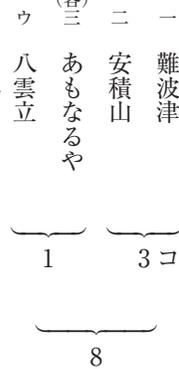
○ (朱) 一方下の句聞違は星一つ、双方聞違は星なし。

一 記録左のごとく認るべし。」御七九ウ

和哥始香記

〔考察〕

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、地香「難波津」「安積山」の香、各三包と、客香「あもなるや」の香一包、ウ香「八雲立」の香一包の、計八包を用いる。すべてを焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。地香のみ試香を行う。

答えには、十炷香札を用いる。「難波津」の香には「一」の札、「安積山」の香には「二」の札を打つ。「あもなるや」の香と「八雲立」の香は、試香がなく、区別ができないので、先に出た香に「三」の札、後に出した香に「ウ」の札を打つ。

連中は、素戔鳴方と下照姫方の五人ずつに分けるが、単なる団体戦ではなく、一対一の個人戦(相手向)の得点を総合して勝敗を決める。本伝書の香之記では、素戔鳴方と下照姫方の、「初桜」と「杜若」、「青柳」と「若竹」、「白藤」と「水仙」の間で、相手方の香の聞き当て方により自らの得点変動している

(後述)。

本香八炷^{*}は、焚き出す順序によって、「上の句」(一・三・五・七番目)、「下の句」(二・四・六・八番目)と名付ける。一・二番目、三・四番目、五・六番目、七・八番目で、「上の句」「下の句」の対が四つできる。「上の句」の香を聞き当てる二点、「下の句」を聞き当てる二点であるが、「上」「下」の対で聞き当てた場合は、各二点計四点を得る。また、「上」「下」の対で聞き違えた場合は、星各二つ計四つとなる。ただし、前述のような相手方との個人戦において、一方だけが「上の句」の香を聞き違えたときは星を二つ付し、双方おなじく聞き違えたときは星一つを付す。また、一方だけが「下の句」の香を聞き違えると星一つだが、双方おなじく聞き違えた場合は星を付けなくてよい。以上の点星の付け方は、全体の聞き当てた人数には拠らない。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている四首の歌のうち、最初の二首の歌は、『日本書紀』に載る。

阿妹奈屨夜^{あめなるや} 乙登多奈婆多迺^{おとたなばたの}
 屨迺^{るの} 阿奈陀磨波夜^{あなだまはや} 弥多爾^{みたに}
 喪会者(或云下照媛)^{うながせる たまのみすま}
 汗奈餓勢屨^{あななげせ} 多磨迺弥素磨^{たまのみすま}
 輔柁和柁邏須^{ふたわたらす} 阿泥素企多^{あぢすきた}

伽避顧禰^{かひこね}

『日本書紀』卷第二、二番

武素戔嗚尊

夜句茂多菟^{やくもたつ} 伊弩毛夜霸餓岐^{いづもやへがき} 菟磨語昧爾^{つまごめに} 夜霸餓枳菟俱^{やへがきつく}
 盧^る 贈迺夜霸餓岐廻^{そのやへがきを} 『日本書紀』卷第一、一番

もつとも、二首目の「やくもたつ」の歌は、次の『古事記』にも見える。

速須佐之男命

夜久毛多都^{やくもたつ} 伊豆毛夜幣賀岐^{いづもやへがき} 都麻基微爾^{つまこみに} 夜幣賀岐都久^{やへがきつく}
 流^る 曾能夜幣賀岐袁^{そのやへがきを} 『古事記』上卷、一番

ただし、本伝書は、その表記文字を見るかぎり、『日本書紀』に拠るものと考えられよう。そうすると、二首ともに『日本書紀』からの採歌と想定される。

これらの歌の作者とされる下照媛と素戔嗚尊については、『古今集』仮名序に、次のように述べられるところである。

このうたあめつちのひらけはじまりける時よりいできにけりあまのうきはしのしたにてめ神を神となりたまへる事をいへるうたなり、

しかあれども世につたはることはひさかたのあめにしては
したでるひめにはじまりしたでるひめとはあめのわかみこのめなり、
せうとの神のかたちをかたにうつりてかかやくをよめるえびす歌なるべし、
これらはもじのかずもさだまらず、うたのやうにもあらぬことどもなり、あ
らかねのつちにしてはすさのをのみことよりぞおこりける

(小字は古注部分。以下同じ)

本組香の冒頭の二首は、和歌本文の表記を『日本書紀』に拠り
ながら、『古今集』仮名序を踏まえていることがわかる。

素戔鳴尊と「やくもたつ」の歌については、続く『古今集』
仮名序に次のような記載がある。

ちはやぶる神世にはうたのもじもさだまらずすなほにして
事の心わきがたかりけらし、ひとの世となりてすさのをの
みことよりぞみそもじあまりひともしはよみけるすさのをの
みことはあまてるおほむ神のこのかみなり、女とすみたまはむとていづもの
くにに宮づくりしたまふ時にその所にやいろのくものたつを見てよみたまへ
るなり、(やくもたつ)いづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがき
を、 () () は割注

そして、これに引き続いて、「歌の父母」が言及されるのである。

かくてぞ花をめでとりをうらやみかすみをあはれびつゆを
かなしぶ心ことばおほくさまさまになりける、とほき所
もいでたつあしもとよりははじまりて年月をわたりたかき山
もふもとのちりひぢよりなりてあまぐもたなびくまでおひ
のぼれるごとくに、このうたもかくのごとくなるべし、な
にはづのうたはみかどのおほむはじめなりおほささきのみかど
のなにはづにてみこときこえける時、東宮をたがひにゆづりてくらみにつき
たまはで三とせになりければ、王仁といふ人のいぶかり思ひてよみてたて
まつりけるうたなり、この花は梅のはなをいふなるべし、あさか山のことば
はうねめのたはぶれよりよみてかづらきのおほきみをまのおくへつかはし
たりけるに、くにのつかさ事おろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさ
まじかりければ、うねめなりける女のかはらけとりてよめるなり、これにぞ
おほきみの心とけにける、(あさか山かけ)見ゆる山の井のあさくは人を
おほふものは、このふたうたはうたのちちははのやうにてぞ
手ならふ人のはじめにもしける

「歌の父母」とされる二首の歌のうち、「安積山」の歌は、夙に
類似歌が『万葉集』に見えるところであった。

アサカヤマ 安積香山
カネサヘミユル 影副所見
ヤマノキノ 山井之
アサキココロ 浅心乎
ワガオモモハナクニ 吾念莫国

あさかやま かげさへみゆる やまのゐの あさきころ
を わがおもはななくに

右歌伝云、葛城王遣^三于陸奥国^一之時国司祗承緩怠異
甚、於^レ時王意不^レ悦怒色顕^レ面、雖^レ設^三飲饌^一不^二肯宴
楽^一、於^レ是有^二前采女^一、風流娘子、左手捧^レ觴右手持^レ
水擊^二之王膝^一而詠^三此歌^一、尔乃王意解悦楽飲終日

『万葉集』卷第十六、三八二九（三八〇七）番

しかし、本伝書の「安積山」歌は、やはり『古今集』仮名序の
歌本文に一致する。

一方、「なにはづ」の歌本文は、この次に述べられる「和歌六
義」において、割注のかたちで載る。

そもそもうたのさまむつなり、からのうたにもかくぞある
べき、そのむくさのひとつにはそへうた、おほさざさのみ
かどをそへたてまつれるうた（なにはづにさくやこの花ふ
ゆごもりいまははるべとさくやこのはな）といへるなるべ
し、

なお、「難波津」「安積山」の歌は、我が国初の類題和歌集『古
今六帖』においても、各題の冒頭に配列されている（第六・

四〇三二・花、第二・九八五・やまの井）。

以上のように考察してみると、本組香を作る際には、『古今
集』仮名序に『日本書紀』を合わせ見たというよりはむしろ、
『古今集』序の注釈書類を参看した可能性を考えてみるべきであ
ろう。

《書卷一》『三千年香

【翻刻】

△（朱）^{ミナトセ}三千年香

躬恒

拾遺和歌集

三千年になるてふ桃の今としより花咲春に逢にけるかな

此哥を以て組侍る也。

一 十炷香の札を用。

一 一二三ウの香、各三包充、都合十二包出香とし、皆焚終て

包紙を開くべし（地香外に指へ。書三オ
誤に出す。）

一 記録点は、客地香の差別なく、独聞二点、二人より一点充。

同香三炷共に皆聞たるは一点充増て六点にする也。聞の下

に褒美認様左の如し。

一の香三炷間は 三千歳

二の香三炷間は 成てふ桃

三の香三炷間は 今年より

ウの香三炷間は 花咲春に逢にける哉

皆中 哥一首を書

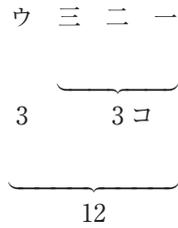
一 記録認様末に顕す。」書三ウ

三千歳香記

〔表〕」書四オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、地香「一」「二」「三」の香と客香「ウ」の香、各三包計十二包を用いる。すべてを焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。地香のみ試香を行う。

* 答えには、十炷香札を用いる。記録点は、地香・客香の区別なく、独り聞き二点、二人以上は一点ずつである。同香三炷をすべて聞き当てた場合は、一炷につき一点を加えて計六点とし、香之記の下端に、褒美のことはを記す。「一」の香では「三千歳」、「二」の香では「成てふ桃」、「三」の香では「今年より」、「ウ」の香では「花咲春に逢にける哉」と書く。十二炷すべてを

聞き当てた場合は、歌一首を記す。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『拾遺集』巻第五賀、二八八番に載る。

亭子院歌合に

みちとせになるてふもものことしより花さく春にあひにけるかな
みつね

三千年に一度実が成るといふ西王母の桃の実の故事「此桃非三千年所_レ有、三千年一実耳云々」(列仙伝)を踏まえ、桃の開花を言祝いだ歌である。五つの褒美のことは、すべてこの歌に拠る。香を全部聞き当てると香之記に歌一首を書くというのはよくあることだが、ウ香を三炷ともに聞き当てたときに、下句「花さく春にあひにけるかな」を記すのは、この賀歌の主旨が下句にあるためだろう。

《書卷一四》梅香

【翻刻】

△(朱)梅香

躬恒

古今集

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見へね香やはかくる、

此哥によつて組たる香也。

一 十炷香の札を用。

一 一二三四五の香、各一包充、色の香一包客香、香の香書八オ

一包客香、都合七包聞香とし、皆焚終て後に香包紙を開く也。

一 地香五包、香の香一包、都合六包、外に拵へ試に出す。色の香は試なし。

一 四の香に二の札二枚打。五の香に三の札二枚打べし。

一 記録は地香、香の香は、何人聞にても一点充、色の香は何

人聞にても二点充也。」書八ウ

一 聞の下に地香の炷数を一葉二葉と認るべし是は梅花也。五葉の心也。客二炷と

もに聞たる下には知る人と認る是は色をも香をもしる。人ぞ知るといふ心なり。皆中を宿のあ

るじと認る。皆無を落花と書べし。

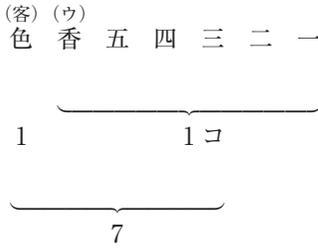
一 記録左の如く認てよし。」書九オ

梅香記

〔表〕書九ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 本香には、地香「一」「二」「三」「四」「五」の香、客香「色」の香、ウ香「香」の香、各一包計七包を用いる。すべてを焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。客香「色」の香を除く、地香五包とウ香「香」の香には、試香を行う。

答えには、十炷香札を用いる。「一」「二」「三」の香には、それぞれ「一」「二」「三」の札を打ち、*「四」の香には「一」「二」の二枚の札を、「五」の香には、「二」「三」の二枚の札を打つ。伝書に記載はないが、「香」の香と「色」の香には、「ウ」の札をそれぞれ一枚、二枚と打つことにより、区別したのであろう。

記録点は、聞き当てた人数に関わらず、「一」「二」「三」「四」「五」の地香とウ香「香」の香を聞き当てると二点、客香「色」の香では二点である。試香のない香を聞き当てたときの得点が

高い。

香之記には、聞き当てた地香の数を「一葉」「二葉」と記す。
また、客香・ウ香を両方とも聞き当てた場合には「しる人」、七
炷^{*}すべてを聞き当てた場合には「宿のあるじ」と書く。すべて
聞き違えた場合は「落花」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『古今集』巻第一春歌上、四一番
に載る。

はるのよ梅花をよめる

(みつね)

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる

客香とウ香の香名は、下句の「色」「香」に拠る。

五種類の地香を用いるのは、梅の花びらが五枚であることに
ちなんだのであろう。また、地香を聞き当てた数を、「一葉、二
葉」と香之記に書くのも、梅の花びらを示している。助数詞
「葉」は、木の葉のように薄いものを数えるときに用いる。

なお、客香とウ香を両方ともに聞き当てたとき、香之記には
「知る人」と記すが、これはいうまでもなく、『古今集』巻第一
春歌上、三八番の和歌に拠ることばである。

むめの花ををりて人におくりける ともりの
君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる

また、すべての香を聞き当てたときの「宿のあるじ」は、『拾遺
集』巻第十六雑春、一〇一五番の歌に用例がある。

北白河の山庄に、花のおもしろくさきて侍りけるを見
に、人人まうできたりければ

右衛門督公任

春きてぞ人もとひける山ざとは花こそやどのあるじなりけ
れ

この歌の「花」は、『拾遺集』における直前の歌(一〇一四番)
が「梅がえ」の歌であることから、やはり「梅」を詠んでいる
と見られる。

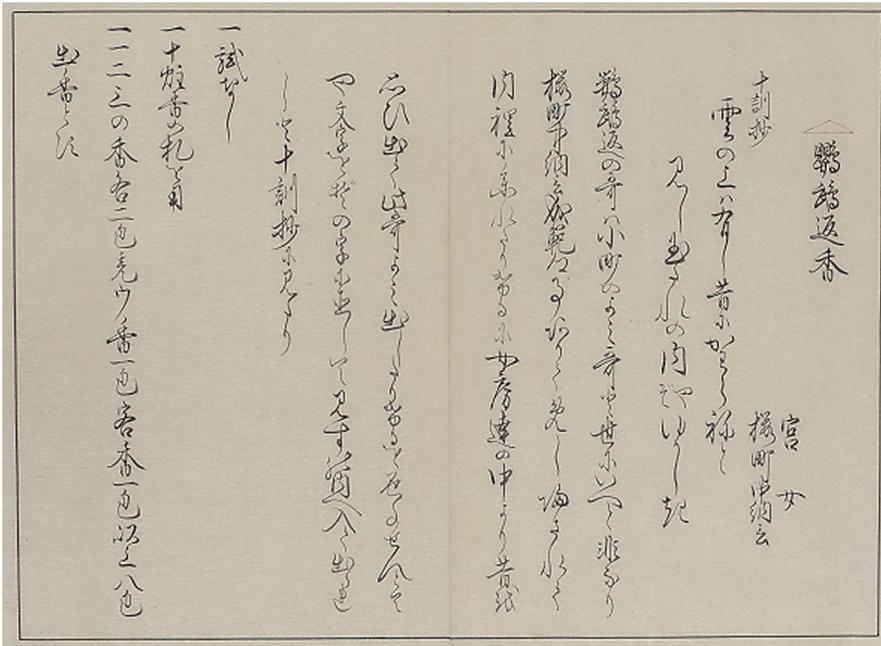
このように、本組香は、冒頭の「香やはかくるる」(香が隠れ
ることはあるものか)という梅花の歌を発端として、その他の
梅の歌の歌句を採り入れながら構成されている。

附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、いずれも二〇一六〜二〇一八年度）における研究の一部である。

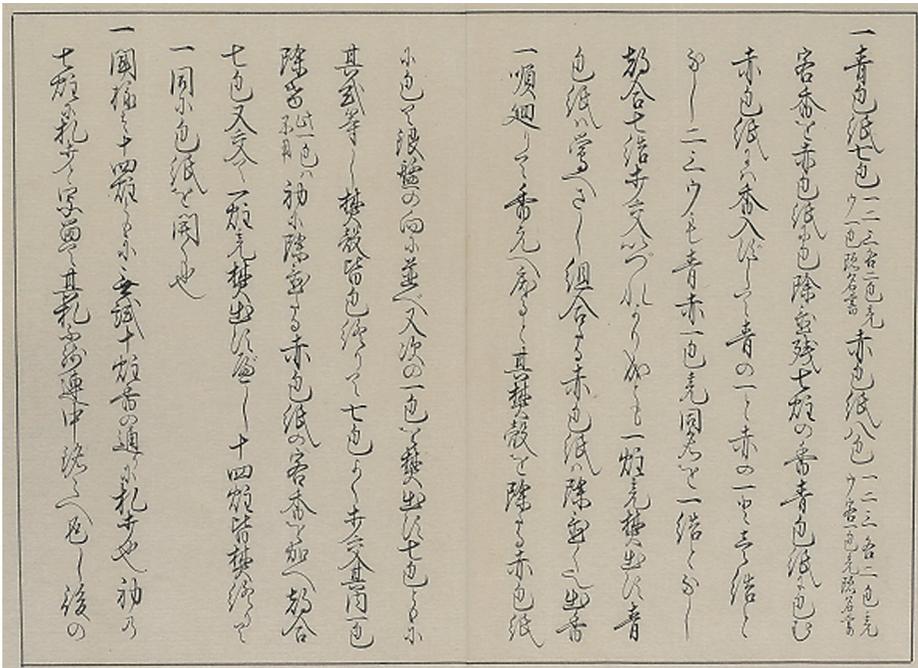
【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。

(御・六二丁表)

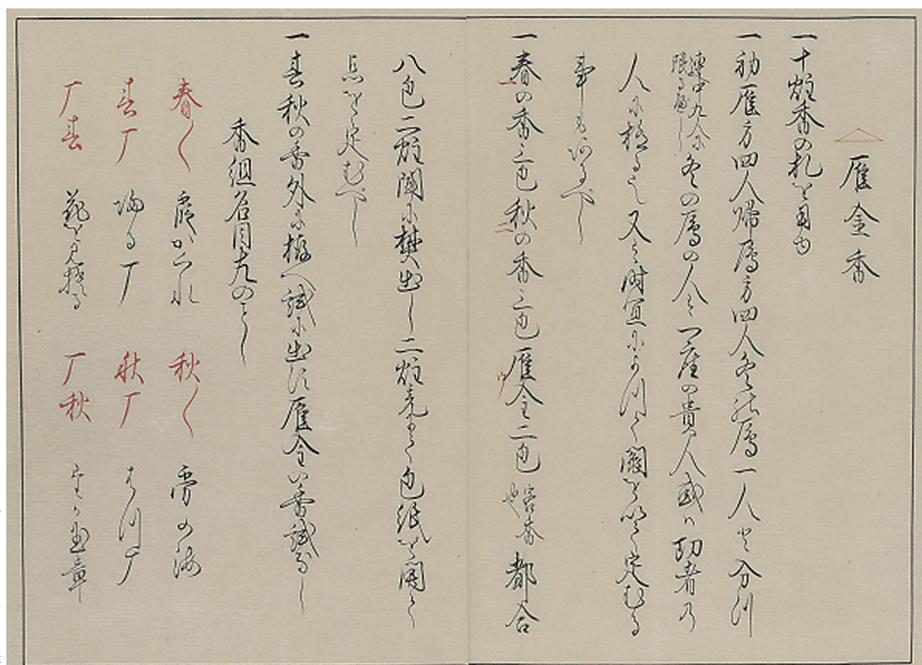


(御・六二丁裏)

(御・六二丁表)

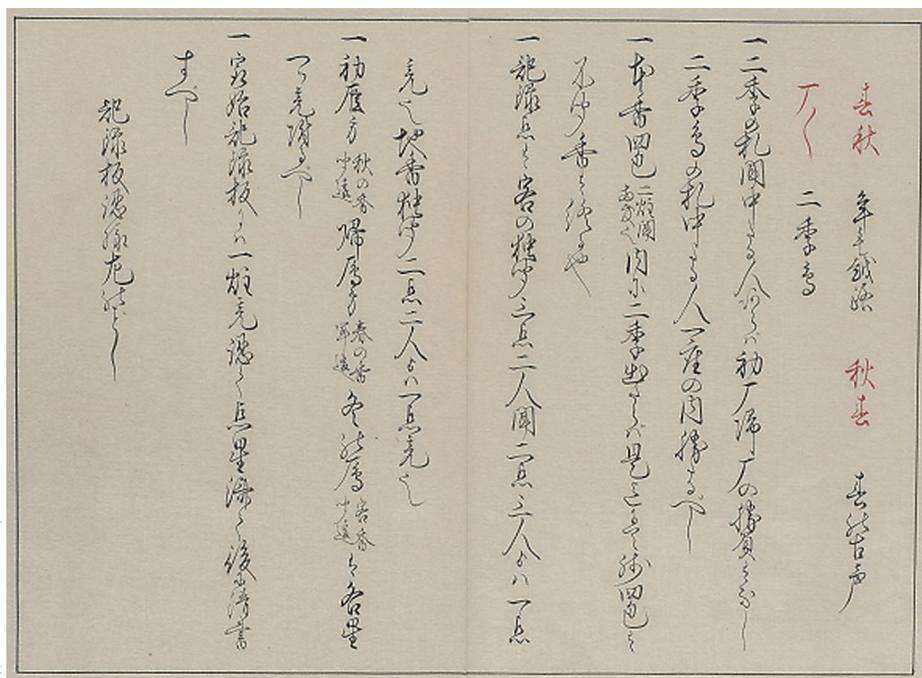


(御・六二丁裏)



(御・七五丁表)

(御・七五丁裏)



(御・七六丁表)

(御・七六丁裏)

月日	若竹	杜若	白萩	香柀	榊	木	初雁	雁金	香	親	若竹	白萩	香柀	榊	初雁	木
	くさくさ															
	くさくさ															
	くさくさ															
	くさくさ															

初雁方
雁金香親

出成流々後不三般組合と札澄と親流々
流極不親

(御・七七丁裏)

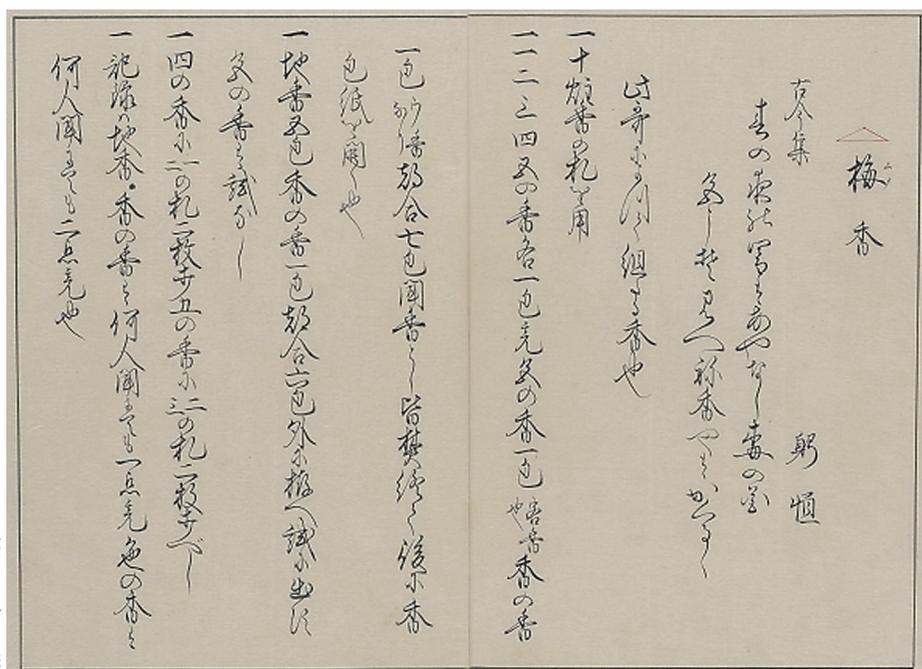
(御・七七丁表)

神代香の始
阿味奈摩夜乙登多奈波多迴行奈餓勢
辱多磨迴彌素磨辱迴阿奈陀磨波夜弥
多爾輔抱和抱邏須阿泥素企多伽邏願祢
人代香の始
夜句茂多菟伊都毛夜霸餓收菟磨詰昧
爾夜霸餓收菟俱盧贈迴夜霸餓收迴
素盞鳴尊

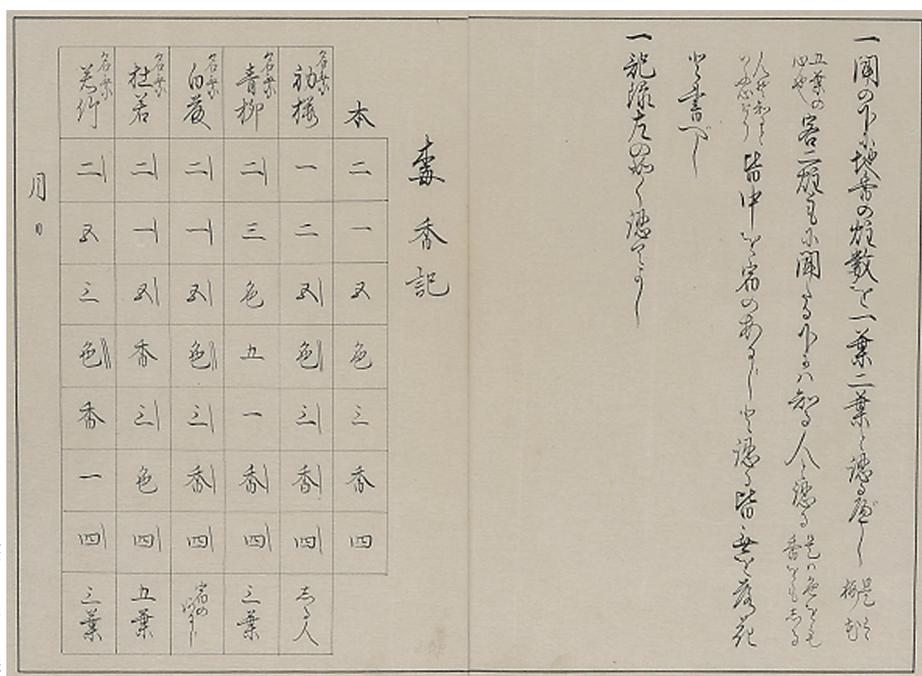
百海學士王仁
雅波摩の始
今ハ喜色ヤ咲ヤハハ也
安禰山彩々(名)山登の
涉々々人々思々々々々
一素盞鳴尊人々照摩々々人々分々々
一十娘香の始

(御・七八丁裏)

(御・七八丁表)



(書・八丁裏)



(書・九丁裏)

